

## 日本における性選好の傾向とその要因

- 愛知県及び神奈川県産婦人科医院における事例分析 -

小 谷 真 吾

The Tendency and Factors of Sex Preference in Japan:  
Empirical Study in Obstetrician Hospitals in Aichi - prefecture  
and Kanagawa - prefecture

Shingo Odani

### 序論

生まれてくる子供について男児を望むか、女児を望むか、あるいは子供を育てるに当たってどちらの性に対して手をかけるか、を性選好 (Sex preference) 呼ぶ。従来、性選好に関する研究は、基本的に人口学の立場で行われてきた。これは人口学において、将来の出生率あるいは人口構造を予測するために、世帯におけるReproductive decision making (理想子供数、性選好など) が調べられてきたことによる。性選好を持つ世帯において、既存の子供に理想とする性の者が一人でもいると、その世帯は避妊法の導入率が高まるなどして出生率が低下することなどが、そのような研究で報告されている (Muhuri and Preston 1991)。

また性選好は近年、国際保健学において着目されてきている。これは南アジアにおける疫学的研究の中で、男児選好 (Son preference : 性選好の内、男児を選好する意識及び行動) を持つ世帯の割合が多い地域において、女児の死亡率が高いことが報告されたことによる (D' Souza and Chen 1980)。それ以後、南アジアにおいて男児選好による女児差別行動と女児の高死亡率の関係を検証する疫学的研究及びフィールドワークが盛んに行われている。また同様の研究が、一人っ子政策下の中国 (Ren 1995)、あるいは他の発展途上国でも行われ始めている。低年齢層の死亡率の高い集団において性選好が存在すれば、どのような集団でも南アジアのような現象が見られると予想される。

一方日本を含めた先進国においては、男女産み分けの議論と関連して、産婦人科学専門家の間で

性選好の議論が行われている（杉山 1996）。医療における男女産み分けの技術は、出産前検査を基にした人工中絶はもとより、パーコール法等の人工受精を前提とした産み分け法まで開発されている。実際、男女産み分けを推進する立場の産婦人科医が存在し、また彼らに同意して男女産み分けを試みる世帯が存在するのである。

しかしそのような研究のほとんどは、性選好の存在は所与のものとして、それに伴う行動、及びその影響を調べることを目的としている。なぜ性選好が存在するのか（あるいは存在しないのか）という要因論を探求することは少ない。たとえ研究の中で要因論に触れることがあっても、限られたジェンダー論関連の論文を引用するに留まっており、その引用の仕方は適切であるとはいえない。性選好の意識と行動は、どのようにして一致するのか。意識の有り／無しの転換が、世帯の社会経済的状態、あるいは集団の自然文化環境のどのような変化によって引き起こされるのか。男児/女児の高死亡率という、性選好に派生してくる問題に介入すべきか否か。介入するに当たって、意識形成、あるいは行動の、どのような段階に介入するのが効果的なのか。また男女産み分けという、医療技術の進歩によって新たに派生してきた問題は、どのように議論していけばよいのか。以上のような命題は、要因が解明されて始めて答えが出されるべきものなのである。

## 本研究の目的

以上のような現状において、本研究では、日本人の既婚男女における性選好の傾向を明らかにし、その要因を考察することを目的とする。その目指すところの第一は、上記のような現状に対して、性選好の要因に関する実証的な事例を提示することである。特に本研究では、個人における主観的回答を素材として要因を分析することに重点を置いた。性選好の意識を対象とした以上、その意識の主体である個人の主観が、要因の分析に最も意味を持ってくと判断されるからである。ここにおいて意識は、世帯が持つものではなく、母親、父親別々に持つものと仮定している。以下、母親と父親の意識の差異についても注目していきたい。

またその目指すところの第二は、現在の日本人集団における性選好の傾向とその要因を明らかにすることである。日本人集団においては、伝統的に男児選好が支配的であったと考えられる。このことを直接的に立証できる資料はないが、社会的に流布している「昔はお家の跡継ぎが大事だった」あるいは「昔は跡継ぎが産めない嫁は実家に返された」などの言説、及び江戸時代に行われていた「間引き」において、しばしば女児がその犠牲になっていたという歴史資料から推測することはできる（千葉、大津 1987）。しかし現状の報告は少なく、男児選好が消失した、あるいは変化したにせよ、その要因は全く分かっていない。日本における男女産み分けの議論に信頼できる情報を提供するためにも、これらを明らかにすることが必要である。また日本人のジェンダーに対する価値観及びその世帯差を表せる点で人類学的にも興味深い。

## 対象と方法

本研究では愛知県O市にある産婦人科医院、及び神奈川県Y市にある大学附属病院産婦人科においてアンケート調査を行った。O市の産婦人科医院は、個人経営の医院でありながら、年間の利用者数が約500人と比較的規模が大きく、サンプルの偏りは少ないと考えられる。また利用者のほとんどは、O市あるいは周辺市町村在住者である。Y市の大学附属病院の年間利用者は、約500人である。利用者の住所は、O市のサンプルより、ややばらついている。本研究においてこの2医院を調査地を選んだのは、十分なサンプル数を確保するためであり、調査に協力を頂き、かつ利用者の多いこの2医院を選んだのである。この2医院間の結果の比較は、アンケートの質問項目で把握できる、サンプルの属性の比較として行い、それぞれの都市の特徴と関連づけて比較することは、本論文においては主な目的とはしない。

### 子供の性別についての意識調査

①あなたの年齢及び妊娠月齢をお答え下さい。

年齢 (         ) 才     月齢 (         ) カ月

②あなたは、今度生まれくる子供が、男の子がいいですか、女の子がいいですか、それともどちらでもいいですか？次のうち一つに をつけて下さい。

a) 男の子     b) 女の子     c) どちらでもいい

③その理由は？) 簡単で結構です)

④②③についてご主人は同じお考えですか？次のうち一つに をつけ、違うなら違う理由 (簡単で結構です) をお書き下さい。

a) 同じ

b) 違う

- 違う理由は？

c) わからない

⑤今度生まれてくる子供は何番目の子供ですか？2番目以降ならこれまでのお子さんの性別もお書き下さい (長男、次女というように)。

⑥ご主人及びあなたのご職業は？) 会社員、主婦というように)

ご主人 (         )     あなた (         )

⑦あなたの家庭の生活状態を自分で評価する) 主観的で結構です) ならどのあたりですか？次のうち一つに をつけて下さい。

a) 上の上   b) 上の中   c) 上の下   d) 中の上   e) 中の中   f) 中の下   g) 下の上

h) 下の中   i) 下の下

アンケートは、母親学級において配布し、その場で回収した。母親学級とは、妊婦に対して妊娠中の生活心得などを指導するため、行われている会合のことである。両医院で出産することを決定した妊婦は、全員この母親学級に出席してくるので、アンケートを依頼するのに適切な場であった。対象者は全員、この母親学級に出席してきた妊婦である。羊水検査、超音波検査等の胎児性別判定は、〇市の対象者は全員これを受けていないが、Ｙ市の対象者は若干名受けていた。

アンケートの具体的内容は、以下に示す通りである（調査票からアンケート部分のみ抜粋）。なお⑦の生活レベルの主観的判断については、結果に述べるとおり、「中流」が〇市、Ｙ市とも90%以上を占めており、意味のある分析が困難であったため、本論文では、考察を行わなかった。

まず①において年齢及び妊娠月齢を聞き、対象者の属性を把握できるようにした。出産年齢が高いほど、あるいは妊娠月齢が進んでいるほど、出産自体への期待が高くなり、性選好を持つことは少なくなることが予想される。

②において対象者の性選好の有無を聞いた。このように性選好を直接に問う方法は、1986年まで31カ国の発展途上国で行われていたWorld fertility survey (WFS) の質問方法 (Cleland, Verrall and Vaessen 1983) に準拠したものである。WFSは、WHOと国連の人口評議会が各国の行政当局に委託して行っていた調査であり、既婚世帯の出産歴、社会経済的状态及びReproductive decision making を把握するためのアンケート調査であった。日本において行われている、厚生省人口問題研究所による出生動向調査にも性選好を問う項目がある (人口問題研究所 1993)。しかしその質問方法は異なっている。つまり始めに今後産みたい子供数を聞き、その上でその子供数の中での男女の組み合わせを問うという方法をとっている。このような方法は、日本人集団としての性選好の傾向を把握する限りにおいては、適当なものである。しかし他集団での性選好の傾向と比較する際、及び子供一人一人についての要因を分析する際には、不適當な方法である。

③において、②の理由を自由回答方式で聞いた。これは緒言で述べたように、性選好の有無及びその傾向の要因を、対象者の主観的判断基準から考察するために設けた項目である。そこでこの回答は、言葉使いにおいて多様であったが、分析において筆者は、語彙は異なっても同様の意味を有すると判断される回答を、同じ分析カテゴリーに含ませるという作業を行った。例えば、「どちらでも元気に生まれてくれればうれしいです」、「元気で丈夫であれば」、「健やかな赤ちゃんが授かれれば性別はどちらでもいいです」あるいは「元気に生まれてくれればそれだけで満足なので」等の回答は、「元気、健康ならどちらでもいい」というカテゴリーに入れた。分析は、そのようなカテゴリーを使用して行った。

④において、対象者の夫の性選好及びその理由を、対象者に質問した。これは父親の性選好の傾向と要因を把握するために設けた項目である。理想的には、夫にも直接に質問するべきだが、条件を同様にすることが困難であるという方法論上の困難から、今回はこのような方式で行った。しかし回答で「わからない」に丸をつけたものは少なかった。日本においては、出産前に夫婦の間で子供の性別について、何らかの話し合いが行われていると考えられる。それ故この質問方法で、夫の

意識もある程度正確に把握できると判断される。

前述のように、⑤において出産歴を質問した。先行研究において、出産歴は性選好と深く関係していると報告されている (Williamson 1978)。一定の性選好を持つ世帯において、既存の子供に選好する性別の者がいないと、より強い性選好を持つようになる。逆にすでに選好する性別の者がいると、その性選好は弱くなる。また一定の性選好を持たない世帯においては、既存の子供が一方の性に偏っていると、今度の子供に対して逆の性を期待するような性選好を持つようになる。日本の出生動向調査でも、このような傾向は報告されているが、前述のような質問方法をとっているので直接に比較できるものではない。

同様に⑥において夫婦の職業を質問した。日本の伝統的な男児選好では、イエ制度と関連した「跡継ぎ」の概念がその要因の主要な部分を占めていたと考えられる。現代でも、夫の職業によっては「跡継ぎ」の必要性は存在すると予想される。また妻の職業の有無も、性選好に関係してくると予測される。つまり妻の職業の有無は、育児における夫婦の分業に影響を与えられられる。分業の形態の差異は、Reproductive decision makingに影響すると考えられるからである。これらのことを検証するために、この項目と性選好との関連を分析した。

なお以上の項目において、世帯及び個人の宗教的属性は問わなかった。世界の集団において、宗教的属性は性選好に少なからず影響があることが報告されている。また日本においても、「丙午の年には女兒を産むな」という言説が存在するように、性選好における宗教的要因を無視することはできないだろう。しかし近年、宗教に関連した事件が頻発している状況下、アンケートの回収率を下げるのが危惧されたので、宗教的属性を問うことは断念した。1996年は丙午でなかったこと、及び回答において宗教的理由を答えた者がなかったことから、問わなかったことによる結果の信頼性の低下はそれほど大きなものではないと推測される。

## 結果

### ・ 対象者の属性

1996年10月から1997年6月まで調査を行い、90.2%の回収率を得た。自分及び夫の性選好についての項目は全ての回答者において答えられていたので、その他の項目に無回答の部分があっても全てのアンケート用紙を分析に用いた。結果として用いたサンプルは、〇市のサンプルで317、Y市のサンプルで191、計508である。

対象者及びその世帯の属性を表1にまとめた。全サンプルにおける平均年齢は29.0才、平均月齢数は5.6カ月であった。また生活状態の主観的な判断は、中流と答えた者が90%以上であった。〇市のサンプルにおいては、平均年齢は27.9才、平均月齢数は4.5カ月であった。Y市のサンプルにおいては、平均年齢は30.8才、平均月齢数は6.8カ月であった。イエーツの補正をした二乗検定（以下「検定」とはこの処理を指す）の結果、平均年齢、平均月齢ともY市のサンプルの方が、

有意にO市にサンプルよりも高い ( $p = 0.01$ )。このことは性選好の傾向における結果に影響を与えると考えられる。

表1 対象者の属性

	全体 (N=508)		O市 (N=317)		Y市 (N=191)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
年齢	29.0	3.8	27.9	3.0	30.8	4.3
月齢	5.6	2.3	4.5	2.2	6.8	1.7

・ 性選好の傾向

全サンプル、及びO市とY市に分けたサンプルにおける性選好の傾向を表2に示した。まず全サンプルにおいて、母親、父親とも「どちらでもよい」と答えた者が、母親で62%、父親で58%と半分以上を占めている。一方、性選好が認められる回答の内、母親において女兒を望む者、つまり女兒選好の割合が大きい(男児選好:8%、女兒選好:30%)。父親においては、どちらとも言えない(男児選好:21%、女兒選好:21%)。また母親と父親の性選好の傾向における差は、検定の結果、有意であった ( $p = 0.01$ )。

表2 性選好の傾向

	全体		O市		Y市	
	母親 (人)	父親 (人)	母親 (人)	父親 (人)	母親 (人)	父親 (人)
男児	41 (8.1%)	106 (21.4%)	25 (7.9%)	69 (22.3%)	16 (8.4%)	37 (20.0%)
女兒	153 (30.1%)	102 (20.6%)	87 (27.4%)	61 (19.7%)	66 (34.6%)	41 (22.2%)
どちらでもよい	314 (61.8%)	287 (58.0%)	205 (64.7%)	180 (58.1%)	109 (57.1%)	107 (57.8%)
計	508	495	317	310	191	185

次に、O市とY市のサンプルにおける性選好の傾向は、大略的には同じように見えるが、詳細に比較すると差異が見られる。まず「どちらでもよい」という答えは、父親においては有意な差がないが、母親においてはO市の方が有意に多い。また母親において、女兒選好を持つ者が、O市に比べてY市の方が有意に多い。父親においては、男児選好を持つ者が、Y市に比べてO市の方が有意に多い。

・ 性選好の判断基準

性選好についての主観的判断基準であるが、分析において筆者は、語彙は異なっても同様の意味を有すると判断される回答を、同じ分析カテゴリーに含ませるという作業を行った。この判別作業により、19の分析カテゴリーが設けられた。その分析カテゴリーを全サンプルにおける結果に当てはめたのが、表3である。ここの分析において、O市とY市の比較は行わなかった。その理由は、第一にそのレベルまで分析できるほどのサンプル量は、今回の調査において取られていないことによる。第二に、両者の差異は考察に値するほど大きくないと判断されたことによる。

日本における性選好の傾向とその要因

表3 性選好の判断基準

分析の結果、まず「どちらでもよい」という回答において理由	母親		父親		母親		父親	
	母親	父親	母親	父親	母親	父親	母親	父親
元気、健康ならどちらでもよい	177	154						
子供の性別には興味ない	40	33						
男児、女児とも価値があるからどちらでもよい	37	30						
すでに男児を生んでいるからどちらでもよい	4	4						
すでに女児を生んでいるからどちらでもよい	8	8						
すでに両方を生んでいるからどちらでもよい	6	6						
すでに男児（女児）を生んでいるからバランスを考えて女児（男児）が欲しい			43	32	15	29		
すでに男児（女児）を生んでいるから経済的に及び仲良くできるように男児（女児）が欲しい			19	6	1	5		
自分の家族が男（女）ばかりだから女児（男児）が欲しい			4	11	3	3		
自分の家族が男（女）ばかりだから男児（女児）が欲しい			2	3		1		
男（女）として自分の経験上男児（女児）が欲しい			6			1		
男児（女児）が育てやすい			38	18	1	2		
男児（女児）がかわいい			10	9	3	2		
男児（女児）が将来的にたよりになる			4	1	1	3		
男児（女児）が将来的に話し相手、遊び相手になる			17	7		22		
跡継ぎとして男児が欲しい					4	9		
周囲の意見を聞いて					5	2		
その他	6	9	1	1	1	1		
無回答	36	43	9	14	7	26		

「どちらでもよい」という回答をした者が大半であった（56%）。性選好に関係する回答はほとんどなかったが、「すでに女児がいるから」という回答が、「すでに男児がいるから」という回答よりも多いのは特徴的である。

次に性選好が認められる回答の内、その割合が大きかった女児選好を持つ母親においては、「すでに男児を産んでいるからバランスを考えて女児が欲しい」という回答を挙げた者が最も多かった（28%）。しかし「女児が育てやすい」という回答も、同じ位多かった（25%）。また「女児がかわいい」（7%）、及び「女児が将来的に話し相手、遊び相手になる」（11%）という回答も顕著

であった。「すでに女兒を産んでいるからその子と仲良くできるように及び経済的に女兒が欲しい」という回答も、少なくなかった（12%）。

次に他の場合（母親の男児選好、あるいは父親の男児選好及び女兒選好）の性選好が認められる回答において、母親の男児選好、及び父親の女兒選好の理由として、「上の子供が女兒であるから」あるいは「上の子供が男児であるからバランスを考えて」と解釈されるものが最も多かった（母親37%、父親31%）。父親の男児選好の理由においては、同様の「バランスを考えて」（27%）に次いで、無回答も多かった（25%）。また母親、父親を問わず、「自分自身の周りが男兄弟ばかりだから女兒を望む」、あるいはその逆の、「自分自身の周りが女兄弟ばかりだから男児を望む」という理由が無視できない数存在した。

・ 性選好の判断基準と出産歴

次に出産歴と性選好との関係を表4に示した。どの項目においても「どちらでもよい」という回答が最も多かった。一方、性選好が認められる回答では、第一子が男児で今度の子供が第二子である場合、母親における性選好は女兒選好である割合が大きく、第一子が女兒で今度の子供が第二子である場合、父親における性選好は男児選好である割合大きい。これらと逆の、第一子が女兒で今度の子供が第二子である場合の母親、及び第一子が男児で今度の子供が第二子である場合の父親においては、そのような傾向は表れない。出産歴がそれ以上になると、サンプル数が少ないこともあって、特徴は見えてこなかった。また検定の結果、初産の傾向と5%の危険率で有意な差があったのは、第一子が女兒で今度の子供が第二子の場合の、父親における傾向（男児選好）のみであった。

表4 出産歴による性選好

出産歴	なし			なし			なし			
	男児	女兒	なし*	男児	女兒	なし*	男児	女兒	なし*	
人数	母親	23	78	193	23	78	193	23	78	193
	父親	57	55	174	57	55	174	57	55	174

  

出産歴	男児1人・女兒1人			男児2人			女兒2人			3人以上		
	男児	女兒	なし*	男児	女兒	なし*	男児	女兒	なし*	男児	女兒	なし*
人数	母親	0	1	9	0	1	4	2	2	5	2	2
	父親	1	2	7	0	1	4	0	0	3	2	2

\* 「どちらでもよい」という回答を、表4、5においては、便宜上「なし」と表記する

・ 性選好の判断基準と職業

次に職業による傾向を表5に示した。サンプル数が少ないためこのような大略的な分類をせざるをえなかった。このため明確なことは言えないが、まず夫がサラリーマン及び自営業である世帯の傾向は、母親、父親とも、職業による分類を行わない全体の傾向と大差はないと考えられる。一方、



日本における性選好の傾向とその要因

夫が建設作業員であった場合、母親、父親とも男児選好を持つ者が多かった。ただし検定の結果においては、夫の職業による有意な差は、全てのカテゴリーにおいて母親、父親とも見られなかった。また母親の職業を分類した場合においても、「どちらでもよい」という回答が最も多く、性選好が見られる回答においても、職業による分類を行わない全体の傾向との差異は見られない。

表5 職業による性選好の傾向

父親の職業	性選好	人数		母親の職業	性選好	人数	
		母親	父親			母親	父親
サラリーマン	男児	33	93	主婦	男児	33	93
	女児	134	87		女児	134	87
	なし	270	247		なし	270	247
自営業	男児	1	5	OL	男児	1	5
	女児	16	12		女児	16	12
	なし	28	27		なし	28	27
建設作業員	男児	6	7	自営業	男児	6	7
	女児	2	2		女児	2	2
	なし	13	11		なし	13	11
その他	男児	0	0	その他	男児	0	0
	女児	1	1		女児	1	1
	なし	2	1		なし	2	1
無回答		2	2	無回答		2	2

考察

・ 日本における性選好の傾向

考察の初めに、今回の調査の結果が、何をどの程度代表するものであるかを、明らかにしておく必要がある。今回の調査は、有意抽出調査であり、無作為標本抽出ではないため、日本人の妊娠期にある男女という母集団を、統計的に代表させることはできない。しかし以下の4点から、少なくとも日本の都市に住む男女の妊娠期における性選好を、ほぼ正確に描いているものであると考えられる。その4点とは、①対象者を三大都市圏に含まれる都市（O市とY市）において選んだこと、②その都市は別々の大都市圏に含まれていること、③サンプル数は多く、結果にははっきりした傾向が認められること、④別々の大都市圏にありながら、2都市の結果には同様の傾向が見られることである。

まず対象者における性選好の有無と傾向について考察を行う。まず結果で示されたように、「どちらでもよい」という回答が、全体で最も多かったが、集団としての傾向は親あるいは世帯の割合によって評価されると考えれば、対象集団は明確な性選好を持たないと判断される。これまでの性

選好に関する先行研究では、「どちらでもよい」世帯のことに触れられることはなかった。しかし性選好に派生してくる問題、例えば女兒の高死亡率などと性選好の関連を正確に知るためには、このような世帯の持つ意味は大きいはずである。また歴史的に男児選好が支配的であったと考えられる日本の現状がこのようである以上、世界の諸集団においても、近年性選好がなくなったような集団が少なからず存在する可能性がある。逆に伝統的に性選好がなかった集団において、近代化などの社会文化的変化により、性選好が存在するようになってきている可能性もある。

さて対象者全体の傾向としては、明確な性選好を持たないと判断されるが、性選好が認められた回答において、女兒選好を持つ母親の存在は無視できない。UNICEFによる性選好の定義、つまり男児を望む母親の、女兒を望む母親に対する比を結果に当てはめてみると、0.27である。この値は、UNICEFの定義に基づく性選好の程度の評価において存在しないほど極端な女兒選好を示すものである。ただUNICEFの定義においては、「どちらでもよい」意識の存在をまったく無視していることから、単純に当てはめられないことを考慮する必要がある。しかし日本の都市に住む男女の中には、一定数の性選好を持つ母親が存在し、それは女兒選好である確率が高いことは明らかである。このことは、人口問題研究所による出生動向調査の最近の結果と一致している（これも単純に比較できないことを考慮する必要がある）。

以上において、日本人において伝統的に支配的であったと考えられる男児選好は、対象者において姿を消していることが明らかである。現在、日本の都市居住者において性選好はなく、性選好を持っている者においてもそれは女兒選好が支配的なのである。

結果において、Y市の方が女兒選好を持つ母親が多く、O市の方が男児選好を持つ父親が多かった。この結果は、O市とY市の都市化の程度差を反映していると考えられる。都市化の程度を正確に判断できるデータはないが、Y市はO市の約10倍の人口があること（総務庁統計局 1991）、及びY市は大都市圏の主要な構成都市であるのに対してO市は衛星都市であることからして、Y市の方が都市化が進んでいることは明白である。都市化の進行の度合いにより、世帯の核家族化の程度が異なり、それが性選好の傾向の差として現れてくるのである。核家族化が、どのように性選好に影響を与えるのかは、後述の要因の考察において詳しく述べる。

O市とY市の対象者には、その属性においても差異が存在したが、その性選好の傾向に対する影響は、筆者の予想と異なっていた。つまり筆者は、妊娠月齢が進んでいるほど、あるいは出産年齢が高いほど、「どちらでもいい」という回答が多いと予想していたが、結果においては、平均妊娠月齢が進んでおり、かつ平均出産年齢の高いY市の対象者の方が、「どちらでもいい」という回答が少なかった。このことは妊娠月齢及び出産年齢が、性選好の傾向に及ぼす影響は、他の要因に比べて少ないことを示している。O市、Y市のサンプルを分けずに、妊娠月齢を6ヶ月以上/未満に分けて、及び出産年齢を30歳以上/未満に分けて、性選好のあり/なしを検定してみても、有意な差が出ないことは、このことを例証している。

・ 性選好の存在しない理由

始めに、対象者全体の傾向として性選好が見られない要因を考察する。主観的判断基準の結果で挙げられた理由では、「健康に生まれてくれればそれでよい」が最も多かった。このことから、現在、日本の世帯の大部分は子供の性別よりも、むしろ障害がないなどの身体的特徴に価値をおいていると考えられる。より詳細に性選好がないことの要因を探求することは困難であるが、世界の各集団でこれまで報告された、性選好（実際は男児選好のみ）と関連すると考えられる要因（性選好の要因になると実証された訳ではない）と日本における状況を比較することは無意味ではないだろう。その要因は、家系の存続（Choe 1987）、女性の労働価値の低さ、結婚における持参金（Miller 1984）、女性の地位の低さ（Chen, Huq and D' Souza 1981）、に大別される。ちなみに家系の存続は韓国で、それ以外は南アジアにおいて報告されているものである。

まず家系の存続は、伝統的に日本で（及び東アジア一体で）支配的であったと考えられる男児選好の最も大きな要因であった。しかし日本の中流意識を持つ世帯においては現在、核家族化が進み、イエ制度が崩壊しつつあると考えられ、家系の存続は日本人の大部分の世帯において価値を失っている。そのため伝統的男児選好は姿を消したのだと考えられる。主観的判断基準の結果においても、「跡継ぎが欲しいから」というカテゴリーに入ったのはほとんどなかった。また制度にかかわらず、経済的に「跡継ぎ」が必要であると予測される自営業の世帯においても、「どちらでもよい」が最も多く、性選好があってもそれは女兒選好であった。経済的にも家系の存続は価値を失っているのである。なお今回の調査では、政治家あるいは医者など家系の存続に関して特殊な状況にある職業の者はいなかった。このような階層における男児選好の存在は、今回の調査では考察できなかった。

女性の労働価値の低さは、雇用機会が依然不均等であるという、現金収入の面のみを考えれば、日本にも存在すると考えられる。しかし子供が女兒ばかりだとしても、日本において親の老後の生活水準が劇的に低下するとは考えにくい。むしろ介護などのいわゆるシャドーワーク（イリイチ 1998）という面では、女性の労働価値の方が高いように考えられる。現金収入だけでなく全ての利益をもって労働価値が評価されるならば、男女の価値に大きな差異は存在しないと判断されるので、労働価値に基づく性選好が対象者の回答からは見出せないのである。そもそも労働価値の性差を評価すること自体が、不可能に近いことであり、現金収入などのみによって労働価値を評価している報告は、ジェンダーに関する議論に真摯に取り組んでいると言い難い。「女性の労働価値の低さ」は、女性差別を反映した、男児選好の「主観的」理由（特に男性の側）であると考えられ、これを要因であると報告している研究は、再検討される必要があると考えられる。

結婚における持参金は、具体的なデータがないため、日本における状況はよくわからない。しかしその金額は、結婚までの育児にかかる金額と比べれば少ないだろう。持参金の影響が考えられる南アジアの集団における、その莫大な金額と比べれば、日本においてその影響はないものと考えてよい。しかし日本においても特殊な地域、たとえば愛知県名古屋市地方などでは影響がないとは言いきれない。

女性の地位の低さは、雇用機会あるいは賃金を見る限り、日本でも存在していると考えられる。しかしそれは女性の生存を脅かすものではない。暗黙の女性差別は深刻であると考えられるが、社会的あるいは宗教的言説において、「女性は差別すべし」と明言されていることは、南アジアの集団と比べれば、ほとんどないように見える。結果でも、「女兒だと差別されるから」という理由で、男児を選ぶような回答はなかった。

・ 母親における女兒選好の理由

次に、対象集団内の性選好の中で顕著である、母親の女兒選好を考察する。母親の女兒選好の主観的判断基準の結果で、最も多かったのは「すでに男児を産んでいるからバランスを考えて女兒が欲しい」という回答であるが、これは他の場合の性選好でも同じように多いので、母親の女兒選好だけの要因としては分析できない。むしろその次に多かった「女兒が育てやすい」という回答を素材として要因の分析を進めていく。この「女兒が育てやすい」という理由の背景として、日本における育児は依然、母親が主に行っていることが考えられる。父親の女兒選好の理由にはこの理由は出てこないことが、そのことを傍証している。また母親が職業を持っている世帯の父親は、女兒選好を持つ割合が大きい。このことは、母親が職業を持っている場合、父親は、自分の育児への参加、あるいは母親への負担の軽減を考慮して、「女兒が育てやすい」という理由に基づいた女兒選好を持つのではないかと考えられる。

この「女兒が育てやすい」という理由から考えられる要因を、3つに分けて分析してみたい。第一に、現代では母親の世代ですでに核家族化が進んでおり、育児文化の伝承が行われなくなったことである。このこと自体は、男児選好及び女兒選好の両方の要因となり得る。しかし母親の世代で、核家族化と同時に少子化も進んでいることから、母親自身の成長過程で、世話を経験することを含めて男児との接触が減少していると考えられる。一方、女兒の育児は、自分自身の成長過程から類推することができる。これらのことが、男児の育児に対する不安となって、このような理由に表れてくると考えられる。

第二は、「女兒がかわいい」と考えている母親が存在することである。この「女兒がかわいい」は、回答の中にも少なからず出てくる。日本において、「かわいい」という形容は女性的属性と結びつく場合が多い。またその「かわいい」には「従順である」という意味が含まれている。「女兒＝女性的＝かわいい＝従順」という連想が、理由に表れてくるのである。

第三は、育児における投資を男児に対してより多く行うべきだ、という考え方が依然日本に存在していることである。男児を大学まで行かせたいという世帯は、女兒を行かせたいという世帯よりも約2倍多い（人口問題研究所 1993）。このことが、男児が生まれると将来社会経済的に苦勞をするという思いになって、理由に表れてくるのだと考えられる。以上の3つの要因が、単独で、あるいは複合しながら「女兒が育てやすい」という理由を形作り、母親の女兒選好を導いていると考えられるのである。

・ その他の性選好

最後に、その他の場合の性選好（母親の女兒選好、父親の男児選好及び女兒選好）の要因を考察してみる。その他の場合の性選好主観的判断基準で最も多かったのが、「上の子供が女兒であるから」あるいは「上の子供が男児であるからバランスを考えて」であった。子供の中での男女比が1:1に近づくように望む傾向は、世界の諸集団でも、他の要因に基づく性選好を持たない世帯で、普通に見られる。このような傾向は、人間においてある程度共通のものなのか、文化に基づくものなのか、その検証は今後の研究を待たなければならない。しかし日本においてもこの傾向を持つ者は少なく、それが要因となって性選好を持つことは明らかである。また結果によれば、第一子が自分に対して異性の場合に、この傾向を持つようになることが多いと考えられる。

「自分自身の周りが男兄弟ばかりだから女兒を望む」あるいはその逆という理由における性選好の要因は興味深い。まず考えられる要因として自分が一方の性別の成長過程しか経験及び観察できなかった場合、もう一方の性別の成長過程に対して好奇心を持つことである。これは母親における女兒選好の要因と全く逆の立場であるが、育児における不安感が希少である親において表れる可能性がある。父親においてこの理由を挙げる者がいることは、これを例証すると考えられる。また日本において、子供の中だけでなく世帯及び家系の中での男女比が1:1に近づくように望む傾向があり、それが要因となっている可能性もある。しかしこの傾向は明らかなものではないので、今後の研究に検証を委ねたい。

その他の要因は、多様であり例数も少ないので考察は困難である。例えば夫における職業別の性選好の傾向で、「その他」の世帯における男児選好の割合は大きかったが、そこでの主観的判断基準は無回答が最も多かった。

・ 性選好に関連する問題について

南アジアにおいては、性選好に関連した女兒の高死亡率が問題になっている。日本においても歴史的には、女兒に対して間引きが多く行われていた可能性が、宗門改め帳などの資料から見られる。しかし結果から見る限り、このような問題は、現在の日本においては全く起こらないといえる。まず日本人全体では、性選好は見られない。性選好を持つ世帯でもそれは、ほとんど女兒選好である。またそれが男児の生存を脅かしている証拠は全くない。現在の日本において、性選好が育児における深刻な性差別行動と結びつくことはない結論できる。

日本において男女生み分けを推進する産婦人科医が存在する。結果にみるように性選好を持つ親が存在する限り、男女産み分けの需要はなくなると考えられる。しかし以上に見るように性選好の要因は、子供の生存を有利にするため、あるいは差別を避けるためといった深刻なものではなかった。親の側の状況が変化すれば、容易に変化するような要因である。このような現状では、日本において産み分けの方法を研究していくことは、社会的な意味があまりない。一方、生み分け

小 谷 真 吾

の方法論の倫理性について社会的コンセンサスが得られているとは考えがたく、このような状況で生み分けを標榜することは、医者側の一方的な差異化、あるいは自己宣伝と見なされてもしかたがない。また生み分けを宣伝し、親側の性選好への志向をかき立てることは、医者側の利益になるばかりである。この問題は、医療人類学の立場から今後とも考察されるべき問題である。

(おだに しんご・国立歴史民俗博物館 COE 研究員／高崎経済大学地域政策学部 非常勤講師)

#### 参考文献

- イリイチ, I. (1998) 「シャドウ・ワークー生活のあり方を問う」 玉野井、栗原 (訳) 岩波書店
- Chen, L.C., Huq, E and D' Souza, S (1981) Sex bias in the family allocation of food and health care in rural Bangladesh. *Population and Development Review* 7:55-70.
- Choe, M.K. (1987) Sex differentials in infant and child mortality in Korea. *Social Biology* 34:12-30.
- Creland, J., Verrall, J. and Vaessen, M. (1983) Preferences for the sex of children and their influence on reproductive behavior. *World Fertility Survey Comparative Studies*, No. 27. International Statistical Institute, The Netherlands.
- D'Souza, S and Chen, L.C. (1980) Sex differentials in mortality in rural Bangladesh. *Population and Development Review* 6:257-270.
- 厚生省人口問題研究所 (1993) 「第 10 回出生動向基本調査 - 第一報告書 - 日本人の結婚と出産」 厚生省人口問題研究所調査研究報告資料第 7 号
- Miller, B.D. (1984) Daughter neglect, women's work and marriage: Pakistan and Bangladesh compared. *Medical Anthropology* 8:109-126.
- Muhuri, P and Preston, S.H. (1991) Effects of family composition on mortality differentials by sex among children in Matlab, Bangladesh. *Population and Development Review* 17:415-431.
- Orlove, B.S. (1980) Ecological Anthropology. *Annual Review of Anthropology* 9:235-273.
- Ren, X.S. (1996) Sex differences in infant and child mortality in three provinces in china. *Social Science and Medicine* 40:1259-1269.
- 総務庁統計局 (1991) 「全国都道府県市区町村別人口及び世帯数 (確定数): 平成 2 年国勢調査」 総務庁統計局
- 杉山 四郎 (1996) 「男と女の生み分け法」 日本文芸社
- 千葉徳爾、大津忠男 (1987) 「間引きと水子・子育てのフォークロア」 農山漁村文化協会
- Williamson, N.E. (1978) Parents' preference and sex control. *Population Bulletin* 33:3-35.